

本学教員執筆書籍の紹介

松岡 悦子 編著

産む・産まない・産めない — 女性のからだと生き方読本

講談社現代新書 税込み価格 756円

松岡 悦子

女性と男性がいれば子どもは放っておいても生まれるもの、というのがこれまでの社会通念だった。ところが、一人っ子政策をとっていた中国では、今さら子どもはいらぬというカップルが増えているし、日本では子どもは欲しいけれど適当な相手がいないと悩む30代の女性たちがいる。子どもは自然に生まれるものというのは過去の話で、現在では子どもは意識して作ったり作らなかつたりするものになった。そういう意味で、子どもはどこにでもいる「自然」な存在ではなくなりつつある。つまり、女性にとっても産むことは「自然」ではなくなりつつあるのだ。これはちょうど水が自然にどこにでもあるものと思っていたら、いつの間にかペットボトルで買わなければならないものになっているのに似ている。

さて、この本は、産むことが必ずしも自然ではなくなった現代社会に生きる女性に向けて書かれた本である。この本の表紙をご覧になった方は、ピンク地に女性が赤ちゃんを抱っこしてほおずりしているイラストを見て、少子化対策の本と思われたかもしれない。けれども中身はそうではなく、この本では、産みたい人も、産みたくない人も、産めない人も、それぞれが自分の生き方を肯定できるように、有益な情報を提供しよう心がけた。執筆したのは、13人の女性と1人の男性である。メンバーは、医療専門職が半分、残りは歴史学、社会学、文化人類学、ジェンダー研究や科学論を専門とする人たちである。このメンバーで、リプロダクション（産む・産まない・産めない）をテーマに、平成15年度～19年度まで日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業」の助成を得て研究を行ってきた。

この本では、リプロダクションにまつわるさまざまなことがらを、文化、社会、歴史、医療などの幅広い視点から扱っている。ざっと中身を挙げてみると、「月経や子宮と優しい関係を作ること」「産まないためのさまざまな方法」「不妊に直面したら」「時代とともに

変わってきたお産」「助産所ってどんなところ」「出産のリスクとは」「母子健康手帳の歴史」「カンガルーケア」などだ。そのほかにコラムとして、デートレイブ、性教育、男性の育児休暇なども扱っている。

リプロダクションは、地球が始まって以来人類が綿々と行ってきたことで、産むことなしに人類の社会は存続できない。その意味で産むことは、女性の体に備わった生理的な力だ。だからこそ、どの社会もこの自然の力をコントロールしようとして、さまざまな文化を羅み出してきた。出産は生理的な基礎の上に、文化的に多様であり得る。たとえば女性がどこで、どんな姿勢で、誰に助けられて産むか、子どもが何を食べ、どんな服を着、どんなしつけを受けるかは文化によって異なる。人類の文化には、これが唯一の正解というものがない、と文化人類学者は考える。私たちが、今という時代のこの社会で行っている習慣は、たまたまこの時代だけのやり方かもしれないのだ。

リプロダクションに関しても、今の私たちの産み方、避妊法、育児のやり方は、この時代と社会の中で生まれたもので、私たちの価値観の反映とも言える。決してこれがいつも正しいわけではないのだ。だから、「産む・産まない・産めない」で書いたことは、正解というよりは、それによって現在のリプロダクションを振り返るための材料だ。私たちのものの見方を広げ、多様なやり方に寛容になる、そして今あるリプロダクションではなく、今後のリプロダクションを考えるための材料だ。この本を読んでくださった方が、「そうか、そんなやり方もあるのか」と思ってくださればうれしし、この本を友達にプレゼントしたい1冊にしてくれるとなお一層うれしい。



(ピンク地の帯をはずした本の写真です)